SHURIJO CASTLE PARK NEWS LETTER UGUSHIKUDAYORI
首里城通信 Vol. 18

御城だより

～令和の首里城の姿を求めて～

高良倉吉 氏インタビュー

首里文化の継承に取組む首里振興会「古式行列」の歴史

首里振興会 副理事長 嘉陽田 詮 氏インタビュー

～令和の首里城の姿を求めて～

首里城復元に向けた技術検討委員会 委員長 高良 倉吉 氏 インタビュー

沖縄の歴史・文化の拠点として多くの人々から親しまれてきた首里城は、令和元年10月31日未明の火災により、正殿を含む9施設が焼失しました。あの日から4年の時を経て令和の首里城正殿復元工事が着々と進む中、平成から令和へと時代を越えて首里城復元のトップリーダーとして携わってこられた「首里城復元に向けた技術検討委員会」委員長の高良倉吉氏に、復元の意義や想いについてお話を伺いました。

平成から令和の復元へと40年以上も首里城復元に携わっていらっしゃいますが、沖縄の歴史学者でもある高良先生が首里城復元に参画されるようになったきっかけを教えてください。

首里城復元事業の歴史は古く、昭和52年（1977年）当時、首里城跡に建てられていた琉球大学が西原・宜野湾に移転を開始したのに伴い、その跡地利用について沖縄県が跡地利用検討委員会を設置しました。そこに委員として参加したことが首里城復元に携わるようになったきっかけです。

委員会で2年間検討した結果、首里城の主要な建物の復元を中心とした歴史公園として整備することとし、昭和59年に沖縄県が「首里城公園基本計画」を策定しました。更に、昭和61年には国の都市公園整備事業として復元整備することが閣議決定され、首里城正殿復元の技術検討委員会が発足しました。そして、昭和63年にはいよいよ首里城正殿の設計が完成しました。

首里城正殿の復元年代を18世紀の首里城とされた根拠について、詳しく教えていただけますか？

琉球史を調査し復元すべき年代を探る

「どの時代の首里城を復元するのか検討する必要がありました」

委員会メンバーの中で琉球歴史研究に携わっていたのは私だけで、首里城の長い長い歴史を整理して、どの時代の首里城を復元するのか検討する必要がありました。様々な資料から歴史を紐解き、過去の焼失や再建・増築年代に関する詳細な経緯を調べ、首里城正殿の履歴書ともいうべきものを作成しました。

首里城は1709年にも正殿が焼失し、1712年から1715年にかけて再建されました。それ以降は大規模な修理はしていても、建て直された記録は残っていないので、この時代（※1709年に焼失し再建された）の首里城正殿を復元すべきだろうと結論づけ、委員会の賛同も得て正殿復元事業が始まりました。

首里城正殿の復元となると、歴史資料の探索が膨大な作業になると思いますが、参考資料が発見されるまでの経緯について教えてください。

『寸法記』との出会い

「沖縄戦で破壊された首里城を越えることができると歓喜したことを鮮明に覚えています」

寸法記「百浦添正面図」鎌倉芳太郎資料　沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵

当時は、戦前の古い写真が数多く残されており、更には、国宝に指定された首里城正殿の昭和初期の大修理（1933年）の図面と資料（『拝殿図』）が文化庁に残されていたので、それらの記録資料を中心に、復元することになるだろうと考えていました。また、首里城で学んだとか、首里城が記憶に残っている古老にもヒアリングしていました。

その作業を進めているときに、『寸法記』との出会いがありました。それは復元対象とした18世紀の首里城正殿の詳細な姿を伝える記録でした。正殿は三階建ての建物ではあるが、一階二階三階の平面図、各部屋の間仕切りもきっちりと記録され、国王の座る一階と二階の玉座（御差床）も描かれているし、正殿の内部と外部の様子が詳細に描かれていました。

この資料の発見により、沖縄戦で破壊された首里城を越えることができると歓喜したことを鮮明に覚えています。

『尚家文書』との出会い

寸法記を中心に作業を進めている頃、どうしても見なければならない資料がありました。それが東京の尚家に保管されている1846年に正殿を大修理した時の記録『尚家文書』です。門外不出の未整理で閲覧できない資料ではありますが、それを見ずに復元することは、大きな悔いを残すことになると考え、東京在住の尚家22代当主を紹介していただきました。面会3回目にして、制限をかけた上で4冊の資料を閲覧することが叶いました。

寸法記を軸として更に付け加えるべきものは何かを、尚家文書を検討し探求しました。

残されていた貴重な資料

往時、中城御殿に膨大な尚家資料が残されていましたが、最後の国王尚泰が明治34年に亡くなった後、伝記執筆を任された東恩納寛淳が、尚泰王即位前の時代からの資料を中城御殿から東京に運ばせていました。沖縄戦により中城御殿の膨大な資料は焼失しましたが、東京に運ばれた資料は残っていました。

『尚家文書500号 百浦添御普請絵図帳』那覇市歴史博物館所蔵

「漆職人たちが首里城を塗装したことに衝撃を受けました」

その尚家資料の中に、首里城正殿大修理の記録が残されていました。寸法記には建築的な情報が多数記録されているが、そこに欠けていた修理の段取りや作業の経過が詳細に記されている資料でした。

一番驚いたのは、建物の塗り替えの際に動員されていたのが、貝摺奉行所の漆職人だったこと。漆職人たちが首里城を塗装したことに衝撃を受けました。

他にもいろいろ分かりました。正殿の龍頭棟飾を製作したのが、当時、琉球随一の技術者、田名宗經（1798-1865）だったことも記録されています。

木材の伐採に関しても、どの時期にどういうタイミングで木を切りなさいと、ヤンバルに指示しています。この時期切ったら虫が入る、だからこの時期に切りなさいと理由も明快です。ヤンバルで切った木をどう運んだとか、細かいことが記録されています。

琉球一の大工が、国王に許可され役人と一緒に首里城に入り、正殿の傷んだ箇所を点検する作業についても書かれています。建物のどこが傷んでいて、どんな工事が必要とか、補強してサポート材を当てると数年間は持つとか、大修理は何年か後になるでしょうと予見するなど、宮大工技術を持ったすごい大工がいました。首里と那覇の大工職人の人数や腕前を調べ、首里城の修理に参加させた記録もあります。

いざ工事に入ると、木曳門を開けて内側に小屋を作り、工事期間中は職人たちにお茶のサービスをしたり、系図座・用物座の石垣を外して下之御庭を作業場所にしていました。奉神門の手摺のシーサーをいためないように養生したが、厚手のむしろやござのようなものを使用したと考えられます。御庭に資材を運んで作業を進めるが、大龍柱や正殿高欄手摺も養生しています。正殿と御内原の間に垣根を作って中が見えないように工夫もしました。修理が終わると関係者を表彰し料理を振舞っており、そのメニューまで書かれています。

尚家文書は、当時の状況が非常に詳細に書かれた資料で、これらの情報を加味しながら、前回（平成）の復元は行われました。

1842年から作業が始まって、1846年に完成するまで4年かけていますが、実際の工事期間はわずか3カ月。あとは全部準備期間で、段取りがすごい。全然てーげーじゃない、きちっとしています。準備に時間をかけて、一気呵成に修理が終わっています。

王国時代の正殿修理は一大プロジェクト、その経緯が詳細に記録されていることで、当時の時代状況が目に見えるように分かります。尚家文書と寸法記をコラボレーションさせて、平成の復元を成し遂げました。

在りし日の首里城

18世紀の時代背景

「多種多様な技術が首里城中心に蓄積されていた」

寸法記と尚家文書が示している18世紀の首里城の姿は、首里城の長い歴史の中で様々な変遷を経て首里城が最終的に完成した姿だと思います。

古い時代には板葺きの時期もあり、最終的に瓦葺にした時代に初めて龍頭棟飾が出てくるが、それを焼いたのは琉球王国の名陶工平田典通（1641-1722）です。

当時、琉球には様々な技術の奉行があり、貝摺奉行、木工関係、焼き物等の役所が首里城正殿の大型木造建築を支えていました。当時の琉球には、再建し修理し維持するだけの技術力があり、高い技術力をもった職人を集めて建設されたのが首里城正殿です。

変ったところでは、中国の冊封使を迎えて御庭で行われた花火大会で、そのような花火職人までいて、多種多様な技術が首里城中心に蓄積されていました。芸能もあり、総合的な技術・文化力を持っていた、その象徴が首里城正殿です。

寸法記の時代は江戸時代、当時日本は鎖国していたが、琉球は中国に定期的に行っているし留学生も派遣しています。外国での色々な動きや技術を見聞することで、様々な情報を持っていました。東アジアの2つの大国である日本と中国と交流しながら、琉球という小さな国を運営していました。運営する為には、様々な経済基盤が必要ではありますが、もう一つは、技術力！琉球の技術力は多岐にわたり、宮古上布などの織物も多彩でした。

北京の国士館に留学生を派遣する資格も与えられていました。中国で料理、医学、石を組んで橋をかける土木技術を学ぶ人達など、琉球という王国を支える気概のある人材が育っていました。

それが、首里城明渡しでその人材が必要なくなってしまい、琉球が培ったもの蓄積したものの価値が下がってしまいました。首里城明け渡しに立会った役人たちの首里城への想い出を調べたが、残っていません。唯一、王国末期の官僚であり知識人である喜舎場朝賢（1840-1916）の残した本『琉球見聞録』が出版されたのは、大正時代になってからでした。そういった人間たちが消えていった激動の時代です。

次ページに続く

～令和の首里城の姿を求めて～

首里城復元に向けた技術検討委員会
委員長 高良 倉吉 氏 インタビュー

首里城復元とは

「現在と未来のために首里城を復元する必要がある」

王国時代の正殿が甦る時、王国最盛期の知識人が現役で働き、仕事をし、会議をし、様々な催事が行われた往時の姿が甦ります。正殿復元に必要な日本建築の技術は、本土の宮大工と沖縄に残されている技術です。

失われた琉球の技術力と美意識を甦らせるのが復元事業です。先人達の想いを引き受けて、現在と未来のために首里城を復元する必要があります。この島にこのような城があった。それを支えた人材や技術力があり、それらを象徴するのが首里城の正殿を中心とする建物です。過去と未来を繋ぐ事業に参加しているという想いがあったから、家庭サービス一切なし(笑)、舞台裏で一生懸命汗を流さないと到底できない一大事業です。

宮大工が伝統道具の釿(ちょうな)を使い「オキナワウラジロガシ」の斫(はつり)作業を行っている。(令和5年10月4日)

当時、日本の建築史に精通している鈴木嘉吉など大先生方が参加し、沖縄の専門家とコラボレーションして復元事業を成し得ました。

唯一無二の存在である首里城を復元することは、沖縄県民の為だけではなく日本全体のためにも必要だと認識していました。

寸法記や尚家文書によると、建築用語は日本建築。琉球は日本の木造建築を習い、琉球の風土や条件に合わせ工夫改良し技術を発達させ、琉球木造建築といってもいいような技術を産み出していました。例えば、琉球風土に合わせた木材にはチャーギ、イヌマキを使用する。これは琉球独自で風土にあっています。沖縄と本土の専門家の協力体制によってできたものが平成の首里城復元でした。

復元に全てをささげた首里城が火災に遭った時の喪失感は言葉にできない思いがあったかと思いますが、お聞かせいただけますか？

朝の三時ごろ首里城が燃えていることを知った。我が家の屋上から見える首里城から炎が出ている、火災だ！TV中継が始まっていた。電話は鳴りっぱなし、記者が押しかけてきた。

火災現場を見ようと思ったが、あえて一週間行かなかった。

現場は見たくはなかったが、非公式に関係者で集まって、再建する場合にクリアべきする問題などについて話し合った。瓦礫の片付け、再建用の資材の確保、木材の置き場所、工事用道路をどう確保するかなど。平成の復元は30年かけてやっと完成した。地下の正殿遺構も残ってるし、令和の復元工事は困難な道のりになると予想された。

火災一週間後に現場を見た。学者、研究者、職人、行政マンが、知恵を絞り汗をかいて、皆の力を合わせてやっと出来上がったものが、一瞬にして無くなるのかと、あーどうしようと思いましたね。

しかし、再建しなきゃならないでしょうということで、幸いに、前回の復元資料が全部残っているので、頭を切り替えて、再建に向けて持てる力を発揮できるかと考えていた。

令和の復元ではこれまでの首里城研究の成果による新たな知見が加わったそうですね。

建物としての正殿に大きな変更はないが、ディテールが変わります。一番象徴的な変化は2階玉座の柱です。新しい写真が見つかったので変更しています。1877年撮影のフランス古写真による若干の変更もあります。

多くの人々から親しまれる首里城として正殿復元のテーマついてお聞かせください。

「首里城が甦っていく姿を共有できるようにしなければならない」

平成復元の時は、建物外観を覆っている素屋根を外し正殿が姿を現した時、皆が衝撃を受けました。しかし、今回は皆が涙を流し悲しみました。首里城はこれほど愛されていたことが分かりました。前回と違う点は、傷んだ首里城を見てもらって、そして着々と復元されていく姿を見てもらうことです。首里城が甦っていく姿を共有できるようにしなければならない。それが「見せる復興」なんです。

参加型の復元ボランティアも含めて、皆の気持ちが繋がるような復元にしなきゃならない。多くの人が見てくれて、技術者・職人の働いている姿を見ることができる、こういう人たちが建物再建を支えていることを見てもらう。琉球王国を思わせるような技術が目の前に展開している。いかにして人材が支えているかを見ることができる。痛々しい姿や瓦礫を撤去した状態も見てもらいました。皆に復興を確認してほしい。そして、甦る過程を共有しましょう！

令和8年秋の完成を目指し首里城正殿本体工事が素屋根内で行われている。
首里城正殿復元整備工事 建方工事(令和5年10月16日)

平成から令和にかけて携わられた復元に込める想いを聞かせてください。

沖縄には、大切にしたい沢山の宝物があります。自然もそうだし、魅力的な財産がいっぱいあると思います。そこに首里城が加わることによって、琉球王国時代に先人たちが築いた文化・技術の蓄積の上に我々が存在していることがしっかりと伝わるはずです。沖縄県はこれらの歴史・文化・自然を基礎にして生活しているんだと理解されます。その意味で首里城は無くてはならない存在です。

戦争で破壊されて47年間首里城は不在だったがそれではダメでした。そのために多くの人間が努力して、絶えず首里城をキープすることが大事です。皆がそれぞれのお気持ちで受け止めてほしいです。火災後に本土の高校生が駅前でカンパ活動していて、エーっと驚きました。県内の高校生も国際通りで寄付を呼び掛けていた。首里城は皆に届いていたと改めて首里城の存在の大きさが分かりました。その意味でも当然取り戻す必要があると考えています。

首里城正殿復元整備工事 建方工事（令和5年9月20日）

イヌマキの植樹にも関わっていらっしゃいますが、その活動についても聞かせていただけますか？

「平成復元の時には県内のイヌマキが無いことが判明しそれは衝撃でした」

王国時代にあれだけ管理されて大切にされていたイヌマキが、その後放置されてしまい、平成復元の時には県内のイヌマキが無いことが判明しそれは衝撃でした。寸法記には山を大切にして100年200年の計で育ててきたと書いてありました。しかし、気が付いてみたらイヌマキがない。それで将来の大修理に備えましょうと、失われたものを取り戻しましょうと、育樹祭が始まりました。

時々、一人でヤンバルまで行き、植樹したイヌマキと語り合っていると、小鳥たちが歓迎して鳴くし、風は吹いてくるし一番幸せな時間を過ごせます。山の空気は最高ですよ！鳥と風と森の仲間と、昔の人たちが山を管理して大切に育てていた気分を味わいながら、過ごすのが心落ち着く時間です。

琉球王国時代は、イヌマキの枝を完全に切ったら厳しい罰がありました。山奉行がいて山を管理する出先機関が名護にあり、山の整備状況を調査して首里にレポートしていました。しっかりと段取りがされていたのが、いつからてーげーになってきたかな？（笑）

高良先生がこの道に進まれた経緯についてお聞かせください。

私は、中学までは南大東島にいました。父親が買ってくれた本に歴史の本があって、それがきっかけで歴史好きになりました。首里高校時代は、4階建て校舎の4階ワンフロアが全部図書館で、そこで歴史関係の本をたくさん読んでいました。中学か高校の歴史の教師になろうと思い愛知教育大学に入学し、夏休みに帰ってきたら琉大図書館で勉強したり、路線バスで勝連城や座喜味城を見学しに行ったりしていました。名古屋にいた2年間に論文も書き始めており『沖縄歴史論序説』は学生時代の卒業論文です。

卒業後は、県庁沖縄史料編集所の職員に採用され、やった！と喜びました。所長は大城立裕さんで海洋博の沖縄館の委員を務めていました。私も委員として頼まれましたが、条件として東南アジアの海外調査に行かせてくれと頼み一カ月間は調査に行き、琉球との関わりを実地調査しました。そして『琉球の時代』を書きました。台湾でも出版されています。

「今後も一生首里城に関わるでしょうね」

＜首里城正殿の変遷＞4期に概略区分

- **1期** 創建～1453年「志魯・布里の乱」が起こり首里城全焼
- **2期** 再建後～1660年首里城焼失
- **3期** 1671年再建～1709年首里城焼失
- **4期** 1712年再建（1715年竣工）～1945年（※1925年国宝指定）

首里城正殿復元対象年代

- ●1768年重修の現存資料『寸法記』
- ●1846年重修の現存資料『尚家文書』
  {1879年（明治12）琉球処分＝沖縄県設置}
- ●1928～1933年 昭和大修理の現存資料『拝殿図』
  {1945年沖縄戦により首里城焼失}
- ●1992年 平成復元
- ●2019年 首里城焼失
- **●2026年秋 首里城正殿復元完成予定**

高良 倉吉 氏 プロフィール
琉球大学名誉教授・文学博士・首里城復元に向けた技術検討委員会 委員長

1947年沖縄伊是名村生まれ。南大東村の小中学校を卒業後、1966年（旧）琉球政府立首里高等学校卒、1971年愛知教育大学教育学部社会科卒、1993年「琉球王国史の基礎的研究」で文学博士の学位を取得。

沖縄県史料編集所職員、沖縄県立博物館職員、浦添市立図書館長を務め、1994年琉球大学法文学部国際言語文化学科教授。2013年～2014年まで沖縄県副知事を務めた。20冊以上の著書・共著がある。琉球大学名誉教授、首里城復元に向けた技術検討委員会の委員長、首里城公園友の会 会長として活躍中。

参考資料
高良倉吉メモ（2020年10月10日）
内閣府沖縄総合事務局「首里城公園事業概要」

復元資料
・1768年重修の首里王府記録『寸法記』（『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』）
・1846年重修の首里王府記録『尚家文書』（『百浦添御殿御普請日記』他3冊）
・1928年～1933年解体修理の文化財行政記録『拝殿図』（『国宝建造物沖縄神社拝殿図』）

首里文化の継承に取組む首里振興会「古式行列」の歴史

首里振興会 副理事長

嘉陽田 詮 氏インタビュー

那覇の三大祭りのひとつとして知られている「琉球王朝祭り首里」の中でも有名な「古式行列」は、琉球王国時代に国王が菩提寺を参詣した「国王御三ヶ寺参詣行列」の復刻版として首里文化祭実行委員会が復元に取り組み、昭和53年11月3日の首里文化祭からスタートしました。

その歴史を継承し、平成19年4月に地域振興を掲げて発足した「首里振興会」の副理事長 嘉陽田 詮 氏に、今年45年目となる「古式行列」についてお話を伺いました。

歴史ある古式行列に取組むようになったきっかけについて教えてください。

2019年の首里城火災や新型コロナの影響を乗り越えて、2023年11月3日（金・文化の日）6年ぶりに古式行列を開催することに感慨深いものがあります。深く関わるようになったきっかけは、平成12年首里文化祭実行委員会の事業部長をしていた頃で、日頃の歴史好きが高じて往時の古式行列について話題にしていたことで、適任と思われ担当になってしまいました。

琉球王国時代に執り行われていた行幸の復元は大変な作業だったのではないでしょうか？

手探りで古式行列の復元に取り組む

古式行列の歴史は古く、昭和5年（1930年）12月12日に、県立第一中学校（現在の県立首里高校）が創立50周年記念行事で再現した、琉球王国時代の「国王御三ヶ寺参詣行列」（天界寺・天王寺・円覚寺）が始まりでした。

その後、昭和35年に戦後の教育復興のために首里の教育まつりが開催されたが、数年間のブランクを経て、新たに首里文化祭として首里らしい行事をしようということになり、各自治会から寄付を集め古式行列を復活させたのが、昭和53年11月3日です。そこから45年連綿と現在まで続いています。

一中生が当時の中城御殿（尚家）から衣装や道具を借りて行列を再現した際の写真を手掛かりに、復元作業に取組み始めたのが現在の基礎となっています。当時、古老の方々は沿道に正座してお迎えしていたそうです。琉球王国の記憶が残っている方々には尊い行事で、国王（ウシュガナシーメ）がお出ましになったと仰ぎそのようにしていたのでしょう。衣装は本物を中城御殿から借りていました。

あまり知られていませんが、実は古式行列の道具 鶏毛帚（トゥイハニウノーイ）の復元もしてきました。江戸上り「慶賀使」に使われた道具などは、徳川美術館に資料が残っているものがあるので、インターネットで資料全てを調べ写しそこから復元しました。資料の乏しい復元作業はかなりの困難を極め、老齢の先生方が虫眼鏡なども使って古式行列の道具の復元作業を行っていました。その後時間の経過で劣化しているものもあるので、現在は作り直しているところです。失われた道具を資料から復元しながら古式行列の歴史をこれまで繋いできました。

「御大典記念（県立第一中等学校50周年記念）の際、一中生による国王行列再現」
那覇歴史博物館 所蔵

「首里文化祭の古式行列」
那覇歴史博物館 所蔵

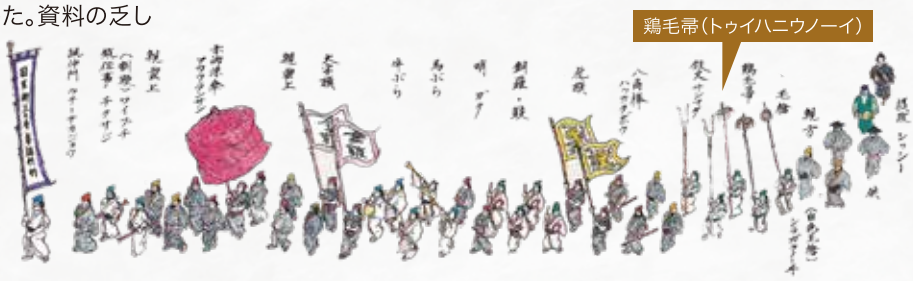
古式行列の絵図は当時の回想録を元に、
阿波連本啓先生が描いたと言われています。

地域にとって「古式行列」は意義深いものがあると思いますが、どのように感じていらっしゃいますか？

地域にとっては、「往時の文化の再来」

首里文化を直接肌身で感じてきた人々がいらっしゃるし、首里には琉球王家の末裔、士族の末裔がたくさん住んでいらっしゃいます。首里の伝統文化が復活することで歴史の重み「うむじゅらさ」を感じ取れる方々が大勢います。首里以外の人も着付けなどの応援に駆けつけてくれるのが心強いですね。

琉球王国時代から続く独特の首里志向が、沖縄県民の心にあるのではと思います。豪華で華やかな古式行列の背後には、沢山の方々のご苦労の歴史があります。若い方を始めとしてもっと多くの方にボランティアとして参加してほしいと願っています。



首里振興会の発足の歴史や掲げる理念について教えてください。

首里振興会の歴史

昭和35年に首里の教育専門の有志の先生方を中心に、戦後教育の復興を掲げて実施された「教育まつり」や、昭和43年から開催された「首里文化祭」を引き継ぎ、平成19年から「琉球王朝祭り首里」として、教育の振興、青少年の健全育成、伝統文化の継承発展、観光産業への貢献を掲げて活動を行ってきました。

琉球王国時代から培われてきた文化を、首里だけではなくて、沖縄全体へ日本へ大きく発展させようと考え首里振興会を設立しました。首里を中心に首里文化を広げていこうとの想いに賛同して、この日の為に一族が集まるという家族もいらっしゃいます。

地域の振興について

首里城を中心とした首里文化を大事にしているし、後世の方々もそのようにしてほしいと考えています。戦前の首里文化は血筋で崇めたりもしていましたが、戦後の平等意識の中にあっても文化そのものは崇拝されています。時代と共に考え方は変化しますが、首里文化はいつまでも残ってほしいと願っています。

この活動を通して、パソコンを駆使し様々な工夫や復元作業を重ねていることで、私たちには生涯学習の一環にもなっています。その意味では年代を問わず地域の方がボランティアに参加し、首里文化を継承していただきたいです。

古式行列に加えて祝賀パレードが続くこの行列は、首里振興会を中心に地域全体で古式行列を支えています。11月3日(金・祝)当日は「首里伝統工芸・物産フェア」を開催します。「首里染織館suikara」で紅型や工芸品などの展示会もしますので、是非お越しください。

今年の古式行列は首里城から出発して練り歩く従来の行列になるそうですね。

注目してほしいところ

今年は、古式行列が6年ぶりに復活するので、先ずは行列を観てほしいとの願いが強いです。首里城公園から池端、龍潭通りを行き、鳥堀交差点までのコースを練り歩く行列はとても華やかで、三司官、摂政(しょうしょう)それぞれに役割がありますので、そこに注目していただきたいです。

本来行列には国王だけで、王妃は国王と一緒には動かないものです。国王と王妃が一緒に動いたのは首里城明渡しの時だけです。イベントとして王妃も参加しますが、そのようなこだわりは随所にあります。摂政、三司官が一緒に歩いているが、本来1名は首里城に残ることになっています。これらの件に関して、歴史学者からは「このような歴史はない!」と叱られたこともあります。その後、これはお祭りですからと但し書きを入れるようにしています。

国王・王妃・御轎(うちゅう)が首里城公園から参加するようになって嬉しかったし、行列が華やかさを増して盛り上がります。

御涼傘(うらんさん)など、古式行列の行列内容を維持する努力もしています。首里支所には首里振興会が昭和53年に製作した御轎が置かれているので、機会があれば見てくださいね。

首里の歴史文化を語るだけでは無くて、行動で示さないと良さが伝わらないし、机上の話だけでは無く、実践的に行動に起こしていくのがいいと思っています。書物から学び現場に行って史跡めぐりをするとよく分かるように、毎年11月3日に開催される古式行列に参加し一緒に行動すると、琉球王国の歴史を体感できるので非常に良いと思います。

国際通りで開催される琉球王朝絵巻行列にも、正使・副使は振興会から参加しているので盛上げたいです。首里地域の古式行列も皆さんに喜んでもらいたいですね。苦労の連続ですが、両方頑張りたいです!

首里城復興への想いをお聞かせいただけますか?

一日も早く首里のシンボルの復興を!との思いです。首里城の復興を古式行列で後押ししたい気持ちがとても強いです。

引退も考えていましたが、正殿が出来るまではもう少し頑張らないといけないのかな。可能な限り自分の足で歩いて首里城の復元を見守りたいし、完成まで見届けたいです。

日々取組んでおられる健康の秘訣があるそうですね。

趣味はウォーキングです。ある日は、首里平良町から浦添経塚経由で内間まで行き、環状線をずっと戻って来て、儀保駅から坂を上がって首里城まで行きました。毎日のように7,000歩くらい歩くかな。これが健康の秘訣と言えるかもしれません。

振興会の活動に関わるようになって35年になりますが、それも現役でいられる秘訣かも知れません。古式行列の実施から片付けまでかなり大変ではあります。古式の道具を片づけ、衣装も陰干しをして、終わるのは夜11時過ぎになるので、皆で首里の泡盛を飲んで労います。やはり首里の泡盛にこだわっています。それも楽しみの一つですね。

～古都首里を愛する人たちの輪～「首里振興会」概要

2007(平成19)年4月に発足した「首里振興会」は、その前身である「首里文化祭実行委員会」の長い実績を受け継いだ首里全体を代表する唯一の民間団体です。首里地区の全文化活動を総括的に発展させ、内外との交流を深めるため新たな組織として発足しました。

「教育まつり」とは

沖縄県の本土復帰のはるか以前の昭和35年(1960年)に開催した「教育まつり」は、「児童生徒の学事奨励と若い世代の励起」を狙いとして地区内の有志によって始められた文化活動で、「首里奨学母の会」等各分野の住民が中心としてなって盛り上げました。

～首里振興会 公式サイトより～

首里城基金

未来へ残そう沖縄の心

貴重な美術工芸品等の収集・復元・保存・人材育成に向けて

首里城基金を活用し、令和3年度より被災した美術工芸品の修理を本格的に開始し、令和4年度までに漆器12件、絵画5件、陶器5件の修理が完了しました。修理には複数年かかるものもあり、今後も長く修理が行われる予定です。修理に際しては、蛍光X線調査や紙の分析など科学調査を並行して行い、修理方法の検討なども行われています。また安定的な修理事業を行っていくため、人材育成を実施しており、県内外の文化財修理、特に漆器修理の技術者に技術共有のための研修を行っています。

令和3年から令和4年にかけて行われた絵画『中山門図』の修理について紹介します。『中山門図』は大正から昭和初期に比嘉盛清（雅号：華山）によって描かれ、鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵の『黒漆首里那覇港図堆錦螺鈿衝立』（1928年）の原画となった作品です。

修理

1

2

絵具の剝落止め作業

3

整形作業/折れ伏せ入れ作業

修理は、1本紙の現状を詳しく確認し、2絵具の剝落を止め、汚れの除去作業を行う、3本紙の失われている箇所や亀裂箇所に補修紙で繕い、今後明らかに折れが生じると思われる箇所に伝統的な修理方法を施す等を行いました。

修理後

首里城基金の仕組み

首里城基金は、首里城での文化遺産収集事業に役立てられています。

- 基金への寄付金等
- 基金の運用益
- 文化遺産収集事業 首里城に関する資料収集

- **収集** 国内外に散逸した文化遺産を収集します。
- **復元** 破損または消失した遺産を復元します。
- **保存** 次の世代のために文化遺産を保存します。
- **育成** 修理・復元・保存に必要な人材育成をします。

→ 展示・一般公開

首里城公園HP　ON THE TRIP

首里城通信　御城だより Vol.18

［発行日］2023年11月1日　［編集・発行］一般財団法人 沖縄美ら島財団　https://oki-park.jp/shurijo/

表紙：『中山門図』（部分）一般財団法人 沖縄美ら島財団所蔵